

ラベンダーであったときの面影を遺すドライ・フラワーを眺め頬杖を突き、ふつと想ふ、人にあらば木乃伊。

花々ゆえに梁やら、壁の飾り板やら、さかさ吊りの憂き目に遭う。人にあらばやすらかに柩にて、世のすべてから解き放たれていようものをなど諳れが蒼穹の一片の雲のよう、脳裡を過ぎつて翳す。くちもとを動かすことなく、くすり笑ふ。

萬物齊同（すべてはひとしくおなじ）と言うが、とても。

いや、違う。花木乃伊^{はなみいら}さまたちも、とてもおしずかに、時が止まったやう、微動もないおしとやか。静寂の死に顔。

ぼやり独り言ちにつぶやく自意識はナルシズムに由来する演技であつた。陰鬱な戯れ言を弄することが、だいぶまえから、じぶんへの、あるやなしやの虚しい癒しとなつていた。心を翳すことが苦しみを優しく撫で慰めるよう、感じるのである。半ば無意識の慣習的な営みでしかなかった。気休めでしかない。治療にもならず、無駄と知るも、残り滓^{かす}のごとき生への固執を、蜉蝣のように脆くて微かな欲を、柔らかに鼓舞するため、必要であつた。慣習とはそういうものである。

木乃伊に就いて思索していた訳ではなかった。乾燥した草花の死骸を見た刹那、何かが閃いていたはずである。喪われた時を求めるように、記憶から呼び戻そう、甦らせようとするも、心の深淵から湧いて来る地の底の古代神のような呪縛が意識を阻み、思い出せなかった。心が赴かない。ただ、眼丈^{だけ}が萎み乾いた花々の骸を見遣っている。輪郭がなく、色彩による、かすかな起伏の、儂く淡い陰翳が網膜の神経に、初秋のように鮮やかに沁み入った。

あきらかな、光の粒のさらさら、無音の透明さが、強い明るさを以て瞑する沙漠の焦燥のようにも観ぜられる。

そうこうするうち、僕とは別人格である僕の冷厳な思考は、峻嶮厳肅たる脳裡のゴチツク聖堂に附属する昏い書齋にて、乾隆帝が愛しそうな龍鳳の古墨を磨っていた。端溪という硯は老坑から産出される水巖石から作るもので、よく水を吸い、滑らかな、きめ細かい石質である。浸した筆を奔らせ、仁和寺旧蔵心経のような垂露、龍爪の技巧を尽くす。巖かさの割には碎けた言葉で、「乾燥、って、とても静かだな」、うふむ、見事な書体でかく記す。鮮やかに筆を返しては、「時の死したるがごとし」とも添える。本阿弥光悦^{ほんあみこうえつ}が高野切^{ぎれ}を愛したよう、僕は他の存在者である思考の墨痕を愛でた。それを真理のごとく感覚し

た。そのような生理作用が結集したのであろう。

言うまでもなく、思考に限らず、僕のすべてが諸々の化学的現象の集積であり、僕が僕であろうはずもなく、ましてや主体者であろうはずもなく、それゆえに世界の奇しき微妙^{みめう}は喩えようもない。

紫のラベンダー、コバルトブルーのサルビア・アズレア、淡い紫のローズマリー、白いかすみ草、それらが乾燥した束。白や碧や紫などの枯れし色合いのハルモニア。厳肅で、輕妙。死のように、美しい。

死は美しい。花々が生を謳歌し、妍を競って咲き誇りて、色変じ、枯れ果て散ることは自然なこと、喩える言葉もない自然の摂理の真妙義であるから。視覚に与える旋律も素晴らしく、自然が作りなす起伏、かたち、色彩の変化など、計り知れなく妙なる繊細さ、人間には決して解く^{ほど}ことがかなわず、あたかも、無数の種類の音色が織りなす調べ、古代ギリシャ古典期の大理石彫刻の筋肉の滑らかな曲線のような^{たへ}（妙）、精緻な朝夕の燦めきが雲に映ずる^{あや}雯。

美しいと言おう。言わなければならない。間違っていたとしても仕方ない、決定しなくては歩めない。行動しなくては生きていくことができない。正解かどうかなんて決められない。現実のことは現実であるため、答などない。問題集のような解答篇など、附録されていない。決断しかない。

ただ、僕が存^いる丈である。存るとは何か？ わからない。ただ、いる丈。それが何であるかはわからない。だが、いる。僕がいるか、他者がいるか、いる丈があるのか、わからない。ない。

そもそも、答があるか。答というかたち、答という設定が世界には措定すらもされていないように見える。すべて、ただ、ある。理不尽であった。ぶっきらぼうに、唐突に、ある丈、ただ、ある丈。

そんな想いが湧き上がってくる。思惟も自然の水と大して変わらない。それも当然であろう、人間も自然の営みの一つでしかない。人為などという言葉は思いついた言葉である。

それゆえ、これは自然現象であって、公理でも、定説でも、正論でもなく、真理・真実ではさらさら（か、どうかの答がない、……たぶん）。適当なことを言っている丈。さよう推定する。それも、そうさ。

人生が常に選択を迫るため、対応している丈でしかない。我が思惟を（到底、信じられ

ないが）信じ、ただ、ただ、選ぶしかない。たとえ、虚しい抵抗であって、精励も儂く、そもそも、勝ちのない闘い（負けのない闘い）であっても、闘う以外には選択肢がない。現実しかない。

いずれにせよ、すべて無に帰する、無とも覚えぬ無に帰する丈^{だけ}である。つまり、僕にはわからない。知覚できない。感覚の上にはないことを以て存在する。非存在であることが無の存在証明である。それが死であった。僕らにとっての、僕らの実存にとっての死である。そう想っている丈だが。

本能は希^{こいねが}っている。もし、どうしても死なねばならぬものならば、苦しまずに、死に逝くと知りつつ、心も静かに、死に赴きたい、と。と言って、取り乱すことを卑しいとは思わない。死を厭い、死を怖れることは、とても自然なことだ。それもまた、美しいと思わなければならない。赦される限りに於いて、生き続けたいと希うことは、決して浅ましくない。

願わくば、安らかに眠るように、家族にも見守られて。されども、布団の上で、去り逝く自らの生^{ツイ}にさよならを言いながら、死に赴くことはとても稀有な例だ。普通ではない。ましてや、家族に見守られ、静かに、などということは。その人は幸福な人である。だが、そうであつてさえも、向こう岸へ渉る際には、藻掻き苦しみ、家族の顔など見えない、見ていられないかもしれない。死に瀕してみないとわからないことではあるが。

それ以外にも、たとえば、突然の事故、事件、疾患などで、じぶんの死を意識することのないまま、自らの死に気がつかず、知らぬ間に死んでしまう事例も、世のなかには数多くある。

死を知らずに死す。僕には、とても恐ろしいことであると思えた。じぶんというものが途絶し、それに気がつかず、そのまま永久に無もなき無へ逝ってしまうのである。

いや、本人は何も気がついていないのであるから、怖ろしいも、何もないのではないか、という考えはもつともである。では、逆に、突然の事故に因って死し、自らの死を知る暇もなく、自覚もなく死した者に於いては、死はなかったことになるか。

あゝ、そんな問いに、誰が責任を持って応えられようか。死というあまりにもシリアスな、徹底して非情で、無表情な現実のまえに。生きようとする者にとっては、その関心のすべてを占めると言ってもよいほどの現実性を帯び、他のすべてが色褪せてしまうまでの

切実さで、リアルに迫真する、死という現実問題のまえに、いったい、誰が、何を応えられようか。神から流出したと伝えられる理性はいとも容易く濁流に無みされ、生きるという価値基準を根底から破壊される。その深刻過ぎる事実を鑑みて考慮すれば、誰もが迂闊なことを言えなくなる。

しかも、それはいつ来るかわからないが、必ず来る。いかなる努力も準備も予想外の偶然でいとも簡単に崩れ去る。誰もが死刑の決定した、ただ、刑の執行を持つ丈の囚人であり、余命を告知された者であることに間違いはない。

敢えて意地の悪い言い方をさせてもらえば、人はじぶんが永遠に生きていると思っている。むろん、いつか死ぬということを、人が知っている。但し、いつかという漠然とした概念に紛らわせて取り敢えずの安堵をし、具体的なアクションがあるまでは永遠に来ないかのような感覚でいる。言うまでもなく、僕もまったくそうであった。いや、実際、今もそうである。

だから、普通の人は、死ぬと宣告されると、愕然とする。つまり、死ぬと知っていた丈で、今来るとは考えていなかった。本気で考えてはいなかったということでもある。死ぬと知った途端、大概の人間が氣力を喪失する。生きていく意欲を喪失する。意気が阻喪する。何もかもについて、行動せんとする気概・氣力が起こらなくなる。実際には、最初から、そうであったにも関わらず、そうなる。

人は死の淵が地盤沈下のように眼のまえに途方もなく大きな無窮の口を開けると、礎が崩れ、大いに狼狽し、震え、動揺が止められなくなる。信じていた諸々のものが色褪せ、あまりに脆弱であること、頼りない不安定なものであることに愕然とし、到底、信じられなくなる。不動であったはずの生活の価値観が、日常のあたりまえが喪われる。こんなにも脆いのか。

先ほど、人は誰も皆、じぶんが永遠に生きているものと思っていたと言ったが、それは当然のことである。そう思わなければ、刑の執行を待つ囚人の人生でしかない。覚悟だ、充実した人生だ、一瞬を輝かせよ、燃えよ、などと言っても、そんなちゃちなつくりものは死をまえにすれば、いとも容易く瓦解する。仕方のないことであった。

人は不死という、空想に縋って生きているが嗤うべきではない。そうしなければ、生きて逝けないのであるから。だが、その皮算用で構築された価値体系はあまりにも儚い。あ

まりに脆い。死をまえにして、呆気なく灰燼に帰する。

こう言うと、あたかも僕はそうではないかのように、高みから偉そうなことを言っているように聞く人もいるであろうが、そうではない。さっきも言ったとおり、僕も同じである。生きるもの皆、同じである。

いや、死に瀕した経験があつて、そう言うのではない(近い状態になったことはあるが。これについては後述する)。それが在ってもなくても、絶対に、間違いなく、すべてが空疎と想えるようになることは必定である。

人によつては、そういう状況に陥つても、強靱なる精神で、希望を喪わずに生きる人々もいた。だが、少なくとも最初の一瞬は、意欲を喪失し、意気を阻喪するであろう。それが第一の反応であり、自然な人の生理である。

生きていることが恐ろしい。そう口にすると、人々からさまざまな説教が降り注ぐであろう。しかし、悪意の塊である僕はこう応える。

「限りある命を輝かせてだって？ 価値のある有意義な人生を全うしようだと？ 生きてきた軌跡を遺す？ 前向きに生きよう？

あゝ、ありきたりな答など、僕だって、いくらでも知っている。だが、そんな価値は、いとも簡単にその地位から失墜し、あっさりと崩れ去るであろう。そんな儚い言葉など、心のなかのどこにも届かない。

事実、実態を鑑みてみよ。必死で知ったかぶりをするあなたたちは未だ死を経験していない。いったい、そのような者たちの言うことに、何の説得力があるうか。死を経験した人たちは、もはや帰つて来ない。何も語らない、永遠に、未来永劫に。

生きているということ、今この瞬間ということ、このただただ只管不安ひたすらでしかない、死への怖れに囚われたるこの感情を解消することなどできそうもない」

僕は他者を蔑んだり、愚昧と考えたり、間違っていると批判したり、愚かであると嘲笑している訳ではない。

なぜならば、畢竟、僕の心配、分析、畏怖、批判などというものもまた、多くの人々が世俗で言っている脆弱な、空疎な、永遠に生きられることを前提とした、身勝手な価値観に基づいて構築する諸々の生きる意欲、人情や儲け話、下世話な欲望、さまざまな細かい

拘りと同じものによって構築される、何ら変わらない、まったく同じものであるからである。

言語というもの、同じような概念（思考を構成する霊的な单子 “モノド”）によって構築されたもの、同じ思考という所作、同じ霊長類の脳、同じアイデア（事物の本質、現象の原型）、同じかたちの考概（概念の活動態、論理の具象形、思考のかたち）を使っているのであるから、それが当然であろう。

心配する人の思惟もしない人の思惟も、同じ要素から構築されている。すべて思考に依るもの、感覚に拠るもの、喜怒哀楽の感情に縁るもの、生の欲望に因るもの、生存の欲望に由るもの、ただ、その向きが違う丈であった。分析、畏怖、批判もすべて同様。

その根底にあるのは、死への想い、生への執著だ。批判も、心配も、畏怖も、分析も、空疎と嘆くことも、永遠に生きていられるという想いに支えられている言葉であって、人の死をまえにそれすらも喪われ、ただ、激しい動揺が襲い、意気阻喪して失意落胆し、歎く。崩壊する。

数日まえ、母が八十一歳の曾祖母を医療法人社団共生会夷胡記念病院へ定期診断のため、出掛けたのであるが、いつもは父が同行するところ、その日は仕事の都合で休みが取れず、僕が同行して手伝うということがあった。僕は母の運転する自家用自動車の助手席に乗り、外の空気を体で吸う快楽を堪能する。今では出歩くことは積極的ではなくも、嫌ではなかった。アルバイトもしているくらいである。

爽快な空であった。心とのタイミングが合えば、青空は人の感情を解き放ち、昂らせ、拡張させる。理屈抜きの理解で、理性もログスもない。その原初は古生物にも遡り、アメーバも持つ理解へも繋がるかも知れなかった。原型を空想すると、理解の原型が決して理の解ではないと感じる。その実体を他者に対する生体反応であると措定すれば、論理憲法や関連法令に遵って、合理の究竟を追究する理論的理解は理解の構造であるかに見えて、実体は空である。

却って、物事を空洞化、空疎化、虚無化させていた。乖離を起こさせている。乖離が違和感を生み、違和感が抵抗を生み、抵抗が気遣いを生ぜしめ、気遣いが意識をさせ、存在を観ぜしむ。

諸考概は納得という安堵がある丈の心的現象でしかなく、理としては空洞に等しい。だが、こんなことを考えていても、何の足しにもならない。虚しくも悲しく、ただ、眺めよ

う、青い眸を。深くて美しい壮大、と言いたくなる空であった。

蒼穹ではあったが、雲一つなく、という訳ではなく、雲はあったが、眩く真っ白いばかりで、むしろ、明るく感じた。西を見遣れば、天穹は深い紺である。あの下あたりは海のはずであるが、数km先で、森や丘があるため、ここからはまったく見えなかった。振り返るに東には山がある。その嶺や樹木は明瞭に照らされていた。聳え上がりながらも、ほがらかに笑うかのようなであった。野性の原初の神々しさがある。

山の名は太泰山たいたいと言った。僕は自動車のなから山を眺めて、ぼんやりと思い出していた。その時点に於いても、既に二年まえのこと、今となつては三年まえに、この場所であつた些細な出来事を。

それは初めての海外旅行に行くまえで、パスポートを作るため、旅券事務所へ行った帰り道であつた。当時も母の運転、車は変わっている。何を思ったのか、その頃のじぶんのメンタルを思い合わせれば、奇異なことではあったが、「ここで降ろして。少し歩きたい。その後はバスで帰るから」と親に言つたのである。バスの本数は少ないが、家からはさほど遠くないので、三十分くらいで歩いて家まで帰ることも選択できた。

どうした胸騒ぎであつたのか。正確には胸騒ぎではなかったが、胸騒ぎのようなものを感じていた。

当時は家に籠つてばかり、久しぶりに外に出たので、心機一転するものがあつたのか。旅行に行ったからといって何も解決しないと承知していても、初めての海外、憧れの美術館廻りに心が躍っていた所為かもしれない。幼少時からよく知っている場所であつた。

小さな、寂びた社がある。苔むした石垣があり、神域は嵩上げしているため、僕は三段の石段を上った。鳥居をくぐる。背景には太泰山があつた。

幹の太さが5mを超える老杉がある。樹齡二千年を超え、衝天するがごとく聳える偉容が周囲を圧する鎮守の杜の王者は僕の幼い頃からの友だちであつた。或る日、僕らは友誼を結んだ。曾祖母が「好きになった木を選び、友だちになってくれるよう、お願いしなさい」と教えてくれたからである。礼儀正しく尊敬の念を持って、丁寧に頼むように、と言ひ添えて。

彼は厳肅であつた。物的非情、無表情に覷ぜられるその面持ちは甚だ深い。僕は声を掛けた。

「久しぶりだね。あなたは老いて干乾びて見えても、いつも壮健だ」

「元気そうだな。だが、心は沈んでいる。魂は褻れ、あたかも、生命を喪っているかのよ

うじゃないか」

「僕の心を観ずるのかな？ 相変わらずだね」

「おまえが知るから、私も知る。萬物は齊同。皆、共生であるが、都合により、プロトコルが相異なる。事情があり、友となったから、境界を壊し、壁を突き抜け、通じ合っている」

「共生か。いい言葉だな。でも、僕の死への病は癒せない」

心が通じ合える友がいることを本来ならば慰藉であると感じるべきなのであろう。老太樹は静かに僕に語った。

「おまえが生まれた良き日はもはや去って存在しない。おまえが死ぬ、忌むべき日は未だ来ない。今、生きている丈でしかない」

僕は歎息する。

「あなたもその科白を言うのか。飽き飽きだよ。あなたも死を体験してはいない。何千年生きようが、僕らと何ら変わらない。その言葉は当てにならない。すべて虚しい。

あなたの意識の質、在り方、構造は僕らのものとは次元を異にする。思料を共通させるためのプロトコルが僕らにはない。僕らの考概の質、在り方、構造はまったく異質なものであるから、同質のように語り合ったり、わかり合ったりできない。その前提の上で敢えて言えば」

プロトコルとは古代ギリシャの巻物の最初の頁をプロトコロンと言い、巻物全体の内容を記載する部分であったが、そこから転じて、草稿や外交儀礼などという意味に使われるようになり、今ではインターネット通信の規格（データの形式やパケット（いつかこの方式もなくなるかもしれないが）の構成など）や、通信の手順（情報発信端末の選定、エラーの際の対処方法など）を定めた規約として、耳にすることが多くなった。この規約に定められた処理をするプログラムが組み込んであれば、ネットワークに接続して、ほかのコンピュータなどと接続できる。通常、僕らは木と通信できていないはずであった。プロトコルがないゆえであり、僕ができたのは魔訶不可思議でしかない。

「僕はあなた方の考概については語れない。しかし、人間の考概については直截に知るがまま、語ることができる」

僕が言う「直截」とは、唐突で説明がないこと、経緯がないということと同義で、根拠がないという意味に等しい。証拠や検証がない。迷信レベルである。

「そもそも、大袈裟に、死を例に持ち出すまでもなく、人の言うこと、価値観、考概には、

根拠も証拠もない。由来も経緯も知れぬ、唐突と言える。生存の原理による身勝手な架空によってすべてを構築し、かたち丈^{だけ}でしかないそれを信じ込んでいる。形骸丈の、仕組みも仕様もない絡繰りで、言うところの意味・意義もどれ一つ取っても憶断に過ぎない。脆弱さしかなく、根拠も証拠もない、実証されていない前提条件を支えにして構築されている。根源から、前提条件のない、零の状態から始まるような論を持っていない。

だから、問い質し詰めれば、即窮する。いい加減さを露呈する。何ら証明も検証もない前提条件を装備した大軍団が、何の権威もなく、無条件に、僕らを睥睨し、逆らうなど偉そうに威張りくさっている」

「なるほど。おまえたちの思考の構造では、そうだ。論理は空疎な絡繰り、捏造、張りぼてでしかなく、出発点にあるものは絶空（空を絶する）で、ただ、ただ、唐突、勝手に決めたもの・ことを基礎、大本、原理、究竟の根源としている。無条件な前提であることが暴露されれば、直ちに崩壊する」

「しかも、僕らはそれら考概で構築された無意味な意地や自己の尊厳を護ろうとする自己保存の欲望と自己肯定の欲望に駆り立てられ、喜怒哀楽する。

その証拠に、他者が僕に反論してくると、僕もついつい言いたくなる」

「どんなふうに言いたくなるのか」

「たとえば、こうだ」

まるで、今ここがバイロイトの祝祭劇場で、僕が総合芸術である歌劇の舞台に立っている偉大な俳優であるかのように、又は古代ギリシャの悲劇が演じられたすり鉢状の劇場に歌う叙事詩の主人公であるかのように、喜悅し、哭き、歎じ、憤りながら、一人二役の劇を演じた。

眼のまえには、僕への反駁を喚き叫ぶソフィストたちが見えている。

彼らが言った、「愛は偉大で、尊い」と。僕は「なぜ？」と問う。彼らは説明し、「無償の自己犠牲であり、すべてを肯定し、美しく優しく包み、虐げられた人を救い、魂を癒し、罪を赦し、人々が一つに安寧し、永遠の平和と愛される喜びをもたらすから」「なぜ。つまり、それが偉大なのは、なぜ。又、そのように作用するのは、なぜ？」

彼らは口を開いたが、言葉がうまく出ずに、口籠ってから、沈黙する。

同様に、彼らが、

「真実は尊い」

と言えば、僕は、

「真実とは何か」

「真実とは、真の实在、本当のこと、あるべきこと、動かし難い絶対の事実で、実態であること、明晰な直観、魂からの切実、現実であるということ。観察などによって、確かに、そうである、実際にそう在る、という感覚が生ずるもの。経験によって、そうであると直截に確認できたものである」

「だが、それら諸要素は何か。たとえば、实在とは？ 本当とは何か（本当という評価設定は何か）？ 事実とは？ 実態であるとは？ 現実とは？ 観察とは？ 実際とは何か？ 在るとは何か？ 感覚とは何か？ 経験とは？ 確認とは？」

「すべて明晰判明なことばかりだ。それらは、すべてそれらである。説明を要さない」
たぶん、僕は哄笑するであろう。

続いて、

「哺乳類は動物である」「なぜ？」「動く生き物を動物と呼ぶ」「なぜ？」「そうであるから、そうである」「それは答というものであろうか」

苦虫を潰したかのような彼らの顔。つまり、彼らは純粹正義・純粹理論のために議論しているのではなく、自己保存・自己肯定という、ただ、生き残る本能で必死になっている。

彼らのうち一人が社の正面へと逝く路の傍らに在った石を拾い、

「これは石である」「なぜ？」「言葉ではなく、これを見よ。これが石だ。これを石と呼ぶからである」「石だと？ ほう。しかし、なぜ、それをその輪郭で区切って、存在者（石）としたのか？ 根本的に問うが、存在者とは何のことか？ 何かであるとは何か？」「…」

いたずらなからかいと言えなくもない。だが、非理性的で、脆弱であることは明々白々であった。

しかも、根拠ない言説であるという点では、僕の批判（揶揄？）も何ら変わらない。同じであった。僕の説も勝手な価値観の集積によって構築されている。人間の考概のうちの一つであるから、当然であった。

老太樹は嘆息する。

「人間は空転する。何かと言えば、因果律を言い、原因や理由を追究する。根拠を問う。意義を糺す。おまえたちは常に、なぜ、と言う。その意味を正確に言えば、他にも選択肢があったのに、なぜ、この選択肢が選ばれたのか、ということだ。

しかし、それをおまえたちは確認したか」

「経験上、明確であるからだろうね、たぶん。誰でも右に行くこともできるし、左に行くこともできる。右に行った後で、あの時は左に行けばよかったと思うのはよくあることだよ。可能性はあった。実際、どちらにも行けたはずだから」

「いや。そうではない。それを確かめるには、過去に遡って左に行くことができたかを確認しなくては、実際に行けた、とは言わない。

右へ行く丈しかなかったとは考えぬか」

「そうかもね。普通の人間は考えない。実際、どちらも行けたはずだと思っているから。選択肢がなければ、因果律を追究する必要はないね。確かに、選択肢の有無に就いて厳密に言えば確認しようがない。いわば、運命だ」

「もし、そうであつたならば、それは運命ではない。他に道がない丈だ。太い道が一本ある丈だ。運命とは意味のない言葉だ。結局、最後にならないとわからない」

「運命は裏切れないからね。右に行こうと思いつながら、実際には左に行くことによって、運命を裏切つてやろうと思つても、それが運命だったと言われてしまえば、それでお終いだ。

しかし、選択肢があつても、なくても、実は同じなのさ。齊同。諸考概は勝手な価値観に基づく礎の上に立つ空っぽなモナドの集積に拠つて構築されたモノでしかない。

そうになると、同じとも言ひ難い、[〃]同じ[〃]と言うべきのかもしれないけれど（同じという概念も考概の一つだから）。自らの尾を噛み、喰らおうとする蛇は喰らうのか喰らわれるのか」

周囲を見渡すまでもなく（いや、見廻しても、よいけれども）、日常茶飯事的にそういうことは世俗にあふれ、日々ありふれていた。

紙幣に小鳥は見向きもしない。紙は実在するが、紙幣は存在しない。貨幣は輝けば興味を示すかもしれない。蜥蜴や蛇や蛙らに、小説の頁を開いて差し出しても、逃げる丈^{だけ}であろう。字が読めないから丈^{だけ}ではない。その物語を知つても、彼らの文化と異なり過ぎて、何よりも人間の構築した世界観が空疎過ぎて理解し得ないであろう。ただ、歌丈^{だけ}は草花すらも聴く。音は実在だから。貨幣の輝き（光線）もそうだが、波長は具体的に実在するから。人間以外にも幾許かの生き物たちも共有する。ただし、僕らの見ている事実が見ているままに、真実であるとするならば、であるが。厳密に言えば、そういう註釈が必要であ

ることになる。

だから、(唐突に言うが)隣接する眞神郡眞神村の有名人で、小説をコンセプチュアル・アートとする前衛的な作家がいるが、彼が単音十穴のハーモニカ『Blues Harp』(ホーナー社製)で一小節を吹き、これが「リアリズム小説である」と言い切った、その「こころ(Hear! 心臓)」はよくわかる。

いや、郡部の人たちを除けば、わかるのは僕のような人たち丈^{だけ}であろうかと思う。日本の他の人間には莫迦莫迦しいに違いない。それでよい。僕がそれをわかると言っても、だからと言って、それで何かが解決する訳でもない。するはずがない。

むろん、解決など、期待していない。これが現実だからだ。現実しかない。現実ではない。恣意的な仕様の変更はできない。問いへの答はない。解答篇は附録されていない。人間が出した答など、勝手な価値観によって構築された嘘偽り、思い込み、自慢、自己肯定の絡繰り、自己拡張の妄想から生まれた架空で、捏造でしかない。あてにならない、何の足しにもならない、何の証拠にも証明にもない、出まかせばかりだ。死というシリアスな問題のまえ、あまりにも軽佻浮薄な、ふざけ過ぎたでたらめだ。そう感じるから、それしか根拠はないけれども。

僕らは、人によって異なるが、それぞれの機を得て、身勝手な価値観がいかにか脆弱であるかに気がつく。僕をせせら笑う奴らはたくさんいる、彼らには現実が見えていない。是正してやる気などさらさらない。どうせ僕らも奴らも五十歩百歩だ。実は大差ない。僕もゆめまぼろしを見ている。そうでなければ、生きること耐えられる訳がない。現実はいかに非情で、絶対過ぎる。眼を逸らさずにいられない。

それに、毎日を映画であるかのように(鑑賞ではなく)観照し、実はフィクションであると知っていても、対世間的には、この映画はリアルなのだと思い込まなければ、人々と融通できない。テレビのドラマや小説を楽しむように架空と知って、楽しむ又は楽しむふりをしなければ、生きていることは辛い。誤魔化さなくては、生活など成り立たない。そうでなければ、日常の感覚など維持できない。人づき合いの妙機や世辞やあいさつや勤務や学校や電車やコンビニエンス・ストアなどが実際に存在すると信じているのでなければ生活を喪失してしまうであろう。

僕には世俗が感じるような価値は、実際には存在しないと、理窟なく、感覚に、直截的

に感じる。憶断だが、感覚上に、実在しない観の存在がくつきりと存在する。だが、この存在とは何かと問われれば、まったくわからない。

結局、世俗の価値を愚かにも無条件に信じる人々と、構造的には変わらないかたちで僕もまた、ただ、唐突に、さよう信じている丈に過ぎない。人間という存在者には、それ以外のことができない。他がないから、そうする。胸郭の奥から込み上げる本音、いずれにせよ、虚しいが、そうわかっていても、そうする。決断だ。

思えば、僕は幼少来、この世の価値観の脆弱さを（最初は漠然としていたが）感じていたし、努めて観ずるようにしていた。そうすることを義務として感じていた。

すべては空疎である。根拠がなく、唐突で、異物であると感じる。異物感、違和感があるから存在感があると思った時期もあったが、そもそも、違和や存在が何なのか、どういう絡繰りで異物感・違和感があると存在が際立つか（気遣いⅡ関心（ゾルゲ）の所為だと言えるが、それについても、なぜ？と問うことが可能である）、なぜ、そうであるかは、まったくわからなかった。わかりようがあるとも思えなかった。それはそうであろう。そもそも、説明や検証は、思惟や考概や言葉から構築されるものである。それであるに、それ自体が問い質されているのだから。

眼は眼を証明できない。少なくとも、僕らが通常使用する理の方程式に遵えば、そういうことになる。

だとすれば、どうして説明を構築できようか。まったく以て、手の尽くし方がない。壊れてしまっていて、手がつけられない。説明や検証のできようはずがない。僕らは呆然と、気を喪い、ただ、悄然・憮然と、たたずむ丈である。

是とも非とも定まらず、いかような結論にも、決か未決かも遂げず、何らかのかたちにも成らず、収まらず、どのようにも收拾せず、いかなる境地にも至らず、中途宙空に浮いて、未遂不収のまま。渺茫としているのに、明晰判明な沙漠。

僕は唐突に思い出す。黄昏の教室の、ぽっかり空いた一つの席。あの異様な感じ。濃い暗鬱な黄金の夕、影は深く底のない漆黒であった。あゝ、僕にとっては、喪失そのもの、一生忘れられない。

そろそろ、語り始めなければならない。あゝ、しかし、どこから語り始めればよいのか。

僕にはわからない。記憶の遡れる限り一番最初から？　そうかもしれない。生まれる前の記憶は無にさえならぬ。幼い頃の記憶はようよう明るくなる黎明のまえ、きよらさやかな夜明けまえの、漆黒から青へと移ろいゆくときのようで、輪郭のない朦朧、混沌としてかたちをなさない。

言語化可能な記憶があるところから話す以外の選択肢がない。予め言って置くが、これは何のカタルシスも齎さない話だ。憂鬱な、きぶんの滅入る話だ。

僕は神社仏閣の好きなこどもであつた。たぶん、糸口はこんなところからでよいのであろう。

なぜ、そこから語り始めたかというと、最近、地元かみすひかがの神栖檜しょうしゆい村にある正思惟寺を訪れ、幼い頃の間をまざまざと思い出したことがあつたからだ。そんな偶然の契機に依拠依存し、話の端緒にしよう。無結構という訳だ。微苦笑ものだ。僕が作為して結構を考えるより、自然に身を委ねた方が幾許かはましであろうということだ。

思惟堂の正方形のかたち屋根のかたちも真上から俯瞰すれば正方形であろうが、どちらかと言えは基壇から上、軒から下の部分の正確な正方形が好きだった。

その四角のなかの、中央に厨子が置かれていた。

金具の透彫りのある黒塗りに唐紅の絵付の厨子。絵は「キサーゴータミーの説話」であつた。

五世紀の説話で、ブツダゴースという人が書いた『ダンマパダ・アッタカター』に説かれていて。ちなみに、この文献は、仏教の最古の經典の一つである『ダンマパダ（法句経）』の短い句の一つ一つに、その句の元となった逸話、或いは後世に牽強附会された因縁物語を集め、注解した南方上座部教義学を基とする説話である。

キサーゴータミーはこどもを産んだが、その子は歩くようになった頃、突如、死んでしまった。彼女は死を見たことがなく、人々が火葬にしようとするのを拒み、「私は薬を探します」と言い張って、児の死体をかかえ、「我が子の病を治す薬を知っている人はいませんか」と尋ね歩いた。

親切な村の人々は声を掛け、「あゝ、お嬢さん、哀しいですが、あなたのお子さんは亡くなられている。既に死んでいるのです。哀しみのあまりでしょう、あなたは正気を喪つていらつしやるようだ。死人を甦らせる薬などない」と言つた。

それでも、彼女は「必ず薬を見つけ出します」と言つた。

それを見た賢者がいて、彼女の助けとなるべきだと思った。「お嬢さん、師が知っています、我が師を訪ねてください」。

そこへ赴き、礼拝し、尋ねた。「師よ、あなたは私のこどもを治す薬を知っているのでしょうか。尊師よ」と。

「そうです。私は知っています」

「あゝ、どうか、是非、それを教えてください、偉大なる師よ、どうか」

娘はほろほろと泣く。師は双眸を翳し、言う。

「一掴みの白い芥子の種です。ただし、その芥子は未だかつて一度でも死んだ者を出したことの無い家でなければなりません」

「わかりました。尊師よ、ありがとうございます」と師に再び礼拝し、死子をかかえ、村へ戻り、家の戸口に立って、

「この家に白い芥子の種がありますか」

その家の人が「あります」と言う、「あゝ、どうか、それを私にください」と言った。白い芥子の種を取る前に訊く。

「この家では今まで亡くなられた方がいらっしゃいますか」

「何を言うのですか、お嬢さん。生きている者は少なく、死んで逝った者たちの方が多いに決まっています」

「あゝ、残念です。芥子の種はお返しします。それでは薬にならないのです」

何十軒もの家を訪ね歩いたけれども、白い芥子の種を手に入れることは出来なかった。夕になって、考えた。

「あゝ、今になって気がついた。何ということでしょう、私はじぶんのこども丈が死んだという思いに囚われていた。けれど、村では生きている人よりも、死んでしまった人の方が圧倒的に多い」と。

そして、彼女は死が人には避け難い事実であることを認識し、釈迦に帰依して死を明らめ（諦め、断かにすること）、心の平安を得た。

これが「キサーゴータミーの説話」である。

この説話は、小学生の頃の校外学習で、クラスの皆とともに、住職から聞いたものである。従って、幼い記憶に頼っているため、あやふやであり、それゆえに正確性については、非情に頼りない。たぶん、僕なりの解釈も混ざっているであろう。

関連して、思い出すのは、当時、同級生であった秀才の佐々篠燐寸夫が言った言葉であ

る。

「へー、大人なのに、そんな人いるのかな。だって、わかり切ったことじゃないか、そんなこと。莫迦だな」

そうかな……確かに、あの年代の僕らでも死を知っていた。避け難く、誰もが例外ではなく、逝ってしまえば、戻って来られない。でも、僕には、この説話はそれ丈で済ませられるようなことではないような気がしていた。当時の僕が何を考え、どう感じていたかはよく思い出せないし、記憶も独自解釈が混ざって変容しているように思えるが。

この説話の肝のところは、人は誰でも死ぬ。死からは誰も免れられないということであった。

死は当然の理であるということである。抗うことは出来ない。そのことを強く再認識させるための説話であった。

文字どおり、死を知らない人にもわかり易い。だが、諦めも亦、永遠に生きていられるという基礎の上に成り立つ諸考概から構築される価値観に依拠するものであることに変わりはない。死のまえに、色褪せるもの。

つまり、僕は今も、当時も、全然、わかっていない。わかるようなきぶんがある丈で、わかっていない。

理解したという納得感でしかない。納得したという、着地点を得て、安堵し、満たされたきぶんだ。

わかるということはそういうことで、突然、何かが通明し、啓け、或る一つのもののことの理解に至るが、実体はない。

根拠に基づく理窟に拠って、理解に達しているものでも、学として一定のプロセスを経ることによって至ることができるものでもない。それでは何もわかっていない。存在にはなっていない。

実感に基づき、敢えて直観のままに言えば、「すべての理解・考概・意識は、ゆえもいはれもなく、ただ、ただ、唐突」だ。むろん、この言葉も何かを理解したことにならない。納得という、きぶんが在るに過ぎない。存在は何て脆弱なものであろうか。

幼い頃の僕は未だ死の畏怖を知らなかった。存在の脆弱を直観していた丈だ。それは自分の存立の脆弱に繋がっていた。生きていることが赦されるかどうか、不安定な命、読め

ない運命、この呼吸がいつ停まるかわからない恐怖。明日が見えない、約束がない。酸素がいつなくなるのか。

だから、エクスタシス（脱自）が初期の、僕の救いだった。時代的には五歳から十一歳までであった。いつ頃からか、はつきりとしなが、遅くとも五歳の頃には間違いない。明瞭な記憶がある。エクスタシスに至るには一定のメソッドがあった。

それは不可能を空想すると起こる。

最初に気がついたのは、宇宙が無限であると聞いて（誰からそんなでたらめを教わったのか記憶がないのだが、それはもう、当時においてすら、かなり古い知識であった。僕の祖父などであっても、宇宙が数百億光年の大きさであることが少年時代からわかっていた）、宇宙よりも巨大な石鹸を空想していた時であった。石鹸とは唐突と思われるかもしれないが、石鹸とは立方体だ。すなわち、石鹸は僕のなかで、思惟堂の正方形と起源を同じにしていた。僕のなかに内在する同じ起源から来る、根源的な、原初的な欲求に由来していた。

無限なのだから、それよりも大きいということがある訳がない。だが、禅行者が観想を凝らして「隻手の声を聞く（片手の拍手を聞く）」ように、それができてしまう瞬間があるのだ。

また頻繁に大爆発を空想した。途轍もない、無際限に巨大な大爆発だ。途方もない広範囲の、涯もなく永い、長い爆発だ。無際限だから想像もできようはずもないのだが、やはり時間を掛けて、刹那的にできてしまう瞬間を待つのだ。

そうやって、次第に僕はエクスタシスをつかみ始めていた。脱自し、じぶんを超えて、じぶんというものからすうっと解き放たれ、抜け出るような感じ、重さのないエクスタシに達するのだ。その解放された脱自感には堪らなかった。何にも例えられない。胸が軽くなり、すつとする。その清々しさ、軽やかさ、清らかさ、爽やかさ、カタルシス、喩えようがない。大きな快楽であったが、そのほかの快楽とは重力感が違った。まったく重さがない。重力から解放されるように、かろらかに広々と拡がって、自由自在にきよらさやかになるのであった。

誰にも言うきもちになれなかった。

以上が僕の最も原初的な合理性の濫用によるエクスタシスだが、次第に様々に多様化、高度化していった。

小学生の高学年になって、さまざまに新しい刺激を求めるようになったのだ。世界の拡がりがかめそうな兆しを感じられていた。

そういったなかで、僕は一定の法則を見つけた。矛盾構造の超越的克服だ。ちょっと退屈な話になるが、事実なので申し述べておきたい。それは基本的には、先ほどの「無限を超える大きさ」と同じ構造である。

自らの尾を咬む蛇とも言った。自らの尾を咬み、喰らい尽くそうとする蛇は喰らっているのか、喰らわれているのか、又喰らい尽くせるのか。

非という言葉がすべてを否定するなら、非を否定した時、どうなるのか。非はその効力を喪うのか、喪うなら、否定もされないのか、効力を喪わないのか。

無がその定義に遵って、真に無であるならば、無ですらないのではないか。無というかたちがあつては、いけないのではないか。矛盾した話ではあるが。つまり、その定義があつて、というのがおかしいのだが、定義がなくては何もなせないのも事実だ。

又、すべてを網羅するならば、すべてを網羅しないことすらも網羅しなければならない。一部丈を網羅し、他を網羅しないことでなければならない。

人は入手できないものに憧れ、それを入手すると、脱自に達するものらしい。

これらは皆、構造的に禅問答と似ている。あきらかなのは「隻手の声を聞く（片手で鳴らす拍手の音を聞く）」や禅窓の外を牛の頭と背が通ったが、尻が通らなかつたは、なぜか、みたいなものだ。ある公案で趙州禅師は「狗子に仏性なし」と応え、同じ趙州が「狗子に仏性あり」と応えている。所謂「趙州狗子」については、無と言っても、有の反対（相対的な無）、や「ゼロでないこと」ではない無（空と言ひ換えるべきか）なので、一概には言えないのだが。

或いは、数学上の集合の概念なども援用した。①集合 Ω は全体集合 U である。なお、 U は任意の集合 A 及びその補集合 A を合わせたものである。②集合 Ω は U の真部分集合 A の唯一の元である x 丈によって構成される。③集合 Ω は U に属さない集合 B （そのようなものはあり得ないように思うが）の唯一の元である y 丈によって構成される。④ Ω はすべて同じである。

このように、論理的には、絶対に超えられない矛盾が思惟を反芻することによって一瞬、どういう訳かわからないが、突き抜けられるのである。

その時に、超越的な解放が、高き雲をも超える高みへ舞い上がる爽快、自由で無辺な、蒼穹の上を自在に、天翔るエクスタシスに襲われ、身も裂け砕けるのである。刹那はもう死んでもよいと思うくらいに。この合理性の濫用による破壊の解放を僕はエクスタシスと呼んだ。

超越的な俯瞰、光燦々たる翼を得て、死から免れ、自在無礙に翔るような、清々しい自由、解放、すっきりと胸が開くような爽やかな軽やかさ、すべてが全うされ、満たされた感覚、それが宗教や芸術の本源だとも思えた。本当かどうかは、確かめられない。それはそうであろう。

しかし、それはアダムとイブとが智慧の林檎を食べた時のように、失墜の始まりの間でもあり、既に崩壊しながら、徐々に喪われ始めていた。僕は当初、それにまったく気がついていなかった。

エクスタシスの再生、安定した受給のために、言葉をもって、それを捉えようとする藻掻き足掻くことが始まると、あの天啓の瞬間、巫女の陶酔、デュオニソスの狂操秘祭のような自己超越感覚、エクスタシーの度合いが薄れるものの、手順を踏んで言葉を連ね、繰り返すうちにどうにかそこへ到達するので続けていくうちに次第に、慣れが生じ、エクスタシスの再生瞬間が短くなる。順を追って思考して逝くと、やがて、ずっと啓けて、エクスタシーに導かれるのだが、時間がかかるし、陶酔は薄かった。

十二歳になった僕は、それ以前から興味深く感じていた芸術というものへと傾倒していった。

それが生み出す陶酔は大きくはなかった。しかし、安易に生み出すことができた。かつ、度合いが安定していて、継続時間が長かった。

印象派の鮮やかな色彩、太陽光の感じの何とも言えない良さ、屋外の空気を感じさせる開放感、クロード・モネやシスレー、ピッサロなどだ。やがて、セザンヌの動的で静謐な色彩へ、ヴァンセント・ファン・ゴッホの生々しい太陽のような黄色が分厚く物的な存在を醸すのを観ると陶酔を覚えた。

オディロン・ルドンやギュスターヴ・モローのエキゾチックな題材と色彩、幻想的。ユイスマンズの小説の影響もあった。ポール・ギュスターヴ・ドレ画いたダンテ・アレギエーリ『神曲』の挿絵も飽くことはなかった。

又、印象派以前へと溯って、ドガやマネ、写実主義のクールベ、ロマン派ドラクロワや

新古典主義の画家たち、優美静謐なアングル、偉大なるナポレオンとともにあったダヴィッドまで一度戻って、完全なる調和のプッサンで止まった。

プッサンの美について。古典的な美に陶醉した。明快な『アルカディアの牧人たち』。そこからは極端だが、古代ギリシャへの憧憬が起こった。プッサンがイタリアに学んだと知り、イタリアへの憧れが再興する。そうこうするうちにまたもやパリの憂鬱へ戻り、今度は詩人を、ステファンヌ・マラルメ、ヴェルレーヌ、アルチュール・ランボー、ヴァレリーなどを暗誦した。

マラルメに深い、感慨を覚える。彼はこの世の一切が虚無であることに遭遇し、キリスト教における神の死を悟り、ロゴスとコギトが解体され、存在の根拠を失う。書く行為（エクリチュール）が人間存在の根底に関わっている所作であるという論、基幹的な思想となった。しかし詩の根源的なあり方へとその思索と魂の探求を深めていくなかで、マラルメは「美」Beauを発見し、それを詩と宇宙の中心原理とする。

だが、その死は突然であった。五十代半ばで、咽喉痙攣によって窒息し、急逝する。咽喉痙攣、僕の耳にはあまり馴染みのない疾病だった。

それを知った時、空想し、とても怖ろしい死のように思ったものである。いったい、なぜ、そんなことが起こるのか、当時は想像もつかなく、ただ、窒息の苦しさを何度でも執拗にイメージするのみであった。

芸術によるエクスタシス、それを経験すると、或る種の欲望が生まれる。誰かに伝えたい、知ってもらいたいと思うようになる。なぜなら、芸術というものの魅せられること、惹かれるもの、崇高さ、快楽は万民に共通する要素、共感し合える要素があったからである。可能性がある、人の欲望は加速する。

だが、そう思った途端に軽やかさは重苦しく、啓かれたさやかさは汚濁し、澄んだ無礙の解放感覚や、その爽やかさは喪失の憂き目となった。イカルスの墜落のように。堕ちた天使のように。

それに、そもそも、他者へ語ることが無為徒勞であるばかりか、危険ですらあり、じぶんがあまりにも皆の感覚と懸離れていて、彼らとその感覚を共有できるなどは、思いもよらぬこと、まったく嫌忌すべき不可能事であった。それでも、強行して友人らに語っていたら、まるで自身を特別な存在であるかのように言う奴だと、いじめの対象にもなったことであろう。

しなかった。意義も価値もない発言で苦を受けるいわれも、必要もない。

小学校の五年生の頃だったと思う。レフ・トルストイ伯爵の『戦争と平和』を読んでいて、青年公爵アンドレイ・ボルコンスキイの死の場面で、ひどく共感した。彼は静かに冷やかであった。生あるものから、既に遠く離れてしまっていた。世俗への関心が薄れたのは、じぶんの死に打ちひしがれたからではない。それは超越的な無関心である。僕にはそれがわかった。以来、トルストイを偉大だと思い続けているし、「戦争と平和」を偉大な作り話だといった大正の私小説家を永久に侮蔑し、赦す気はなかった。私小説家を書くものよりも、トルストイの方が事実だし、真実だし、何よりも現実であって、リアルだ。彼らの勝手な空想や妄想を事実・真実だと思い込んでいる私小説家どもの哀れを笑っていた。と言うか、彼らは能天気で、とても牧歌的だ。羨ましくもある。

深い黄昏の教室は鬱金の憂鬱に浸されていた。

兼ねてから治療のため、隣の市の医療法人社団救生会夷胡記念病院いこに入院し、学校を休んでいた香澄夕夢のお見舞いへ、クラスの有志で行くことが決まった。僕もそのうちの一人だった。病院に行くと、事前に聞いていたとおり、容態は安定していて、良いタイミングであったようだった。人知の及ぶ限りに於いては。

しかし、実際に行ってみると、想っていたような感動的な展開にはならなかった。彼女の眼は既にこの世を見ていない。生を超越し、世俗の価値を張りぼてと感じていた。僕らの緊張や同情や、心配、興奮、誇らしいきもちなどを見透かし、その虚しさを感じ、孤独の淵の底に独りで居る。聞く者も、見る者も無意味であった。半眼のまま、諦めて、まったくの無関心である。その眼は言っていた、誰にもわかりはしない、と。彼女はもはや僕らに眼を向けようとすらしなかった。

突如、容態が悪化する。

彼女が急に身をよじり、藻掻き出す。薄眼を開けていた丈の二つの眼は、かっみひらと睜かれ、縫すがるような、虚しく空間を噛み捉えようとするようなまなざし、恐怖、狂乱、何も見えない閉ざされた絶望があった。僕らに説明しても、何の足しにもならない、何もわかりやしないという絶望を孕んだ恐怖。彼女の世界しかない。ただ、今欲しいのは酸素、酸素、それ丈。心臓のポンプとしての機能が突如、必要な血流量の最小限界値を下回り、全身の細胞が酸素を悲鳴のように欲する。だが、非情な現実の絶壁は微動もせず、絶叫したくな

るほど、絶望的に供給はなかった。

怖ろしいことだった。救いたくても、僕らはそこへは入れない。何もしてあげられない。彼女は独りで死んで逝く。どんな言葉掛けも意味がない。彼女が欲しいのは酸素丈だ。他はどれもこれも頓珍漢な勘違いなのだ。怖ろしいことだった。僕らの社会は、生活は、愛も正義も真実も、何の意味もないのだ。

僕らは誤魔化して生きている丈だ。

皆、死ぬことはわかっているけれども、本当のことだとは思っていない。本当にはわかっていない。

だから、余命を宣告されると動揺する。

誰もが事実として、余命を宣告されている。二秒後に生きていられる保証などない。まったくない。莫迦莫迦しくない。現実である。絶対の非情さで厳然と聳える、科学的な物的事実、動かし難い過酷さと苛烈さ、……

だが、そんなことをいつも自覚していては、生きていられない。だから、忘れ惚けていてもよいのだ。「人が無関係な人に同情しないのは、もし、世界中の不幸をリアルに切実に感じたら、到底、生き続けていけないからだ」という趣旨の言葉を、どこかで読んだか聞いたか、定かでないがしたような記憶があるが、それと同じだ。

誤魔化して、眼を逸らすしかない。存在の一切は死を誤魔化すためにある。永遠に解決しない。するはずもない。辣韭のように、永遠に皮を剥いても、何も残らない。それでしかない。そうでなくてはならない。

死なないことはできないし、他の解決などあろうはずがない。心構えができたなどと言う輩は砂漠の砂ほどもいるが、生きていられるとき丈の思い上がりで、その節が来れば烈しく混乱し、いたたまれないほど怯えるであろう。

この問題については、人間にはなすすべがない。抵抗など、無駄であった。僕らに自由な選択はない。主体者としての自由な意志決定もない。事象への理解もない。蒙昧な憶断しかない。僕らは木の葉だ。大海の表層部において、深海を知らず、なすがまま波のまにまに、ゆらゆら。

その時が来たら、大いに動揺し、怯え、悲嘆し、苦しむしかない。よくはないが、他の事実がない。

僕は不安が止まらなくなった。何も手に着かない。学校へは行けなくなった。父母には一度丈話したが、この人たちには何もわかっていない、ということがわかった丈であった。所詮、この人たちも死に逝く人でしかない。死に瀕して驚愕する人でしかない。僕の苦しみや不安は、不死にならない限り解決しない。

あなたたちが言おうとすることなど、どれも百回くらいは考え抜いたよ。

友人たちは、なおさらだった。

誰も何もわかっていない。わかっていたら、あんなふうに生きていられないはずだ。やっていられないはずだ。そんなふうにしていられる余裕もない。すべては現実、事実から眼を逸らして捏造した余裕だ。

人々は皆、人を信じている。人間存在を信じている。日々の生活を信じている。良い人や悪い人というものがあると信じている。家族を信じている。友情を信じている。恋愛を信じている。進学を信じ、学歴を信じている。音楽を信じている。社会を信じ、道徳を信じ、科学を信じている。科学的合理精神を信じている。畢竟、人を、人間存在を信じている。

だが、人はいない。蠢く細胞丈だ。酸素とエネルギー源を渴望する細胞丈だ。死に瀕すると本性が露呈する。人間存在はあっさりと消失し、人間性は痕跡もなく喪われ、細胞の叫び丈が実在する。人は表面の薄膜に過ぎない。人は細胞が存続しようとアミノ酸や糖や酸素を求める化学反応でしかない。

日々、無事を懇願した。もし死ぬなら、苦しまずに死ねますように。心臓が止まることがないように。毎日祈った。祈るしかできない。気をつける丈、努力丈では全然足りない、ほぼ無力だ。人間は何て脆弱で、無力なのか。何て小さくて、儚いのか。

一年近く経ち、改善もなく、高等学校へ進学するための受検は出来なかった。

ここに至るまで、何度もメンタルクリニックに連れて行かれる。薬は少し効くようであったが、それ丈のことであった。死なくなる訳ではない。死なないのでなければ、解決にならない。又両親は何度かカウンセリングを受けたようだった。本来は僕が受けるべきなのであろう。だが、余計なお節介は欲しくなかった。死なくなるまでは癒えやしないのである。

死への畏怖は癒せなかった。カウンセリングなんて要らない。局所麻酔のコカインか、鎮痛効果の高いモルヒネの方がよっぽど救いであった。

叔母からギリシャへの誘いがあった。十七歳の時である。従兄弟の睿黎児えれじは同じ歳であった。叔父が父の弟で、叔母はギリシャ人だが、夫とは死別し、今は母国ギリシャに住んでいる。

「ギリシャやエーゲ海を見て、ポジティブなきもちになれば、フランスやイタリアも廻ってみましょう」

彼らが神栖檜かみすひ村にいた頃は、僕と睿黎児えれじとは兄弟のように育った。彼には妹がいた。斐璃空いりくという名前だった。

叔母は僕のことを、とても心配していた。僕が芸術に興味を深く持っていたことを覚えていて、ヨーロッパ文明の発祥地である古代ギリシャの文化と、地中海の気候とを以て、病める魂を癒そうと考えてくれたのである。

僕は最初、断ろうと思った。それを無駄と思っていたからだ。だが、幼い頃からの憧憬の地であるため、じぶんとしては大決断の上、行くことを決めた。そう思い切ると、不可思議なるもので、必要に迫られた意欲が反発力のように湧き上がり、パスポートを取るなど、親の力を借りながらも、自らいろいろと興味を持って調べ、行動した。新しい知識は意外に楽しいものであった。

新幹線で東京まで行き、成田から飛行機に乗って、ドーハの国際空港で乗り換える。三時間以上も乗り継ぎ時間があったが、これでも短い方だった。睿黎児えれじが迎えに来ていた。古代ギリシャの古典的な顔立ち、碧い眼に金の髪、白皙で、こんなふうに生まれていれば、厭世的ではなかったかもしれない。と少し丈思った。まあ、そうでもないかもしれないが、いや、絶対にそうではないであろうが、頭は勝手に思うものである。ちなみに、妹は日本人的であった（と記憶している）が、あまりに幼い頃であったので、顔は変わっているかもしれない。今は、十四歳のはずであった。三つ下だ。

「やあ、久し振り。変わってないや、いや、結構、変わったか」

当然、僕の状態は知っていて、どういうふうにも声を掛けていいか考えながら、喋っているのがわかった。語調とかでそれを感じる。血の繋がった、思慮深い子だった。

「たぶん、変わったよ。睿ちゃんもね。お互い、もう十七だから」

「寥りょう（僕のことだ）に最後に会ったのは、いったい、何年まえだろう、七年かな。八年ま

え？」

「いや、七年まえだった」

歳月は消えても記憶が存在する。よく考えると不思議であった。存在そのものが魔訶不思議なものなのであろう。過ぎる過去の群像を見て今を見ていた。窓の外には輝く白い雲がある。

「そっか。じゃ、飯でも食おう。こっちだよ」

彼はこのハブ空港に慣れているらしく、要領よく、そちらこちらを説明しながら、案内してくれた。食事をしながらも、少しも退屈することなく、思いつきなどで盛り上がり、あつと言う間に時刻が来て、少し焦ったくらいであった。飛行機に搭乗し、アテネ国際空港に着陸する。空港内に駅があり、そこからアテネ市街へ向かった。

椅子に坐ると、睿黎児が声を掛ける。これも氣遣いだ。彼の氣遣いは居心地がよいものであった。

「どう、元氣？ 疲れたよな。エコノミーって狭いよな」

「そうかもしれないけれど、テンション上がっていて、疲れているのか、よくわからないや」

「あはは、そんなもんかもね。今でも本はよく読むの？」

僕はこどもの頃から本を読むのが好きだった。小説の類丈じゃない、哲学やドキュメンタリーや漫画など何でも。取り敢えず何かあれば、活字を手にしてじぶんを落ち着かせるタイプだ。

「いや。この数年は何も読み通していないんだ。手に取って、ページは捲るけれど、読み続けられない。興味はあるんだけど。何でかな。それもよくわからない」

「そんなもんさ。何でもわかったら、吃驚だ」

「睿ちゃんも、よく読んでいたよね」

「俺は集中して読み通す派だ。最近、科学に関する本が多いな。ファンタジーとか読まなくなった。あと、哲学の本かな」

「そうなんだ、読まなくなっちゃった。僕は」

「友だちがフランスに移住してね、哲学の授業があるって言っていたんだ。バカロレア(大学入学資格試験)も哲学の試験があつてね。文系の場合だと、試験全科目の点数のなかで占める割合が二〇%を超えていて、一番比重の重い科目らしいよ」

「凄いいね。羨ましい国だな。日本の価値観は愚劣だ。実利主義的なんだろうね。浅ましい

よ」

「哲学と言っても、必ずしも、カントやヘーゲルやショーペンハウエルやニーチェなんかを研究すること丈ではないようだよ。それよりは、人間として、自由で、自主的に物事を考える能力を身につけさせるのが主らしい。」

フランス的だね。けれど、自由を得たいという欲望のうちには、じぶんが王様でありたいという欲望が潜在していることも、見逃せないけれどね。いや、俺はフランスを大いに尊敬し、称讃するよ、エスプリではなく」

さまざまな空想が脳裡を廻った。

「ふうん、ますますいいな。哲学を基幹とする偉大なる自由の国か。直接的な実利を追い求めることは魂を汚す愚行。もつとも、日本の学生には、哲学なんて興味の無い人が多いとは思うけれどね」

「くだらない奴らさ。真実や本質を知ろうとしない。何で生きているんだろう」

思い出した。彼は美しい顔立ちに似合わず、昔からシニカルであった。犬のような乞食生活をしたシニシズム（犬儒学派、キュニコス派）の人たち。ソクラテスの弟子だったアンティステネス、シノペのディオゲネスなど。

叔母はホテルのロビーで待っていた。北欧人のような背の高い人だ。僕は見上げながら、処女神アテナ・パルテノスを連想していた。象牙と黄金、大理石の彫像。

「よく来たわね。今日はゆっくり休んで」

僕の眼は、その隣にいた女の子に釘づけになった。

斐璃空（いりく）は睿黎兒と同じ白晢で、鼻梁は高くないけれども、ずっと細く、繊細に尖っていて、漆黒の長い睫毛に、真っ直ぐで絹糸のような黒髪、双眸は燦々としていた。少年のような痩せ方の未熟な青林檎の四肢、美というものの、新しい基準を覷ずるような気分であった（むろん、そんなことはない、そう想えた丈だ）。華奢な顎と、白い歯、朱の口唇は生命の初々しきでありながら、ミケランジェロの『ピエタ』よりも、哀切の優美と可憐微妙なること喻えもなきように見えた。僕のその時の魂に、時機として、うまく嵌まったのであろう。こういうものはタイミングだ。季節が合えば、特別な存在であるかのように見えるものだ。

その夜はそのホテルに泊まり、翌早朝からアクロポリスを目指して歩き始める。街の建物越しに、白い石灰岩の巨大な巖の頭が見えていた。

朝八時半、メトロのアクロポリス駅を出ると、すぐに入り口があり、叔母が一人二〇ユーロの入場料を払ってくれた。あとでわかったことだが、ここは、いわゆる裏口で、本来の正面であるプロピュライアを最後に見るかたちになる。

円柱をならべるパルテノン神殿が見えている。智慧の神、戦いの神、芸術の神アテナ・パルテノスに捧げられた神殿。

僕らは緩やかな坂を上った。デュオニュソス劇場が見えてくる。現存するギリシャ最古の劇場、紀元前六世紀頃、アイスキュロスやソポクレス、エウリピデスなどの劇が上演された場所。一万四千人から一万七千人を収容したらしい。

さらに上ると、医学の神アスクレピオスの神域であった。ペロポネソス戦争で疫病が流行った時に平癒祈願で建造されたという。三本の大理石の円柱と欄間が残っている。僕は平癒を祈った。時間は重なっている。その厚みが岩の存在に実在していた。

「まだまだ、上らなければならぬけれど、大丈夫？」

叔母が僕の様子を見て訊いた。見ればわかることなので、大丈夫ですと答えた。なぜかにはかんで顔を上げられなかったが、叔母を意識して、と言うよりか、璃空を意識していることは、じぶんでもはつきりとわかっていた。彼女は僕を見て微笑んだ。眩しい。どこまでも青い空だ。

ヘロデイス・アッティコス音楽堂が見えてきた。これはローマ時代で、収容人数も五千人。少なく思えるが、デュオニュソス劇場が大き過ぎるというべきなのかもしれない。

ふと見下ろせば、アテネの市街が広がっていた。

「あと少しね」

斐璃空が言った。僕は振り向かずにならずいた。もう見えている。叔母が何度か見ているはずだが、感嘆の声を上げて言った、

「あゝ、素敵。着いたわ」

紺碧の空、大絶景。

周囲をぐるりと見渡すことができた。アテネが白く広がっている。石灰を建築の塗装に使うのは熱を避けるためらしい。

偉大なる指導者ペリクレス。パルテノン神殿はペルシャ戦争の勝利を都市アテネの守護女神アテナに感謝してペリクレスが建築家のフェイディアスに造らせた大神殿であった。ペンテリコン山から切り出された石材が多大な労苦と費用をかけて運ばれ、建築されたド

ーリア様式の清楚で偉大な建物である。エンタシスの円柱の威厳、梁にはかつて見事な彫刻群があり、彩色もされていたと聞いていた。それが白い巨大な岩の上に、蒼穹を背景に、偉容を衝天させている。

久々に味わう胸すく快感があった。

整然とならぶ円柱の列。偉大なる四角だ。黄金の長方形（実際には黄金比ではないらしい）。しかし、繊細な曲線を持つ。だが、僕は天空を背景に天空へと聳え上がる四角に眼を奪われた。そう思った。中枢の真奥の源に、幼い頃から原的にある型だ。

現在残っているのは、完成当時の数十パーセントあるかないかであった。壁はなく、容赦ないことを言えば残骸にも等しい。

しかし、その偉大なる本質はまったく損なわれていないように感じた。

巨大なペルシャ帝国との戦争は、専制君主制と民主制の闘いでもあり、奴隷と市民との戦いでもある。自由と必然の闘い。しかし、疫病によって、そんな古代ギリシャ人ですら絶望的に刹那的快楽に走った。

僕は次々と浮かぶ層に夢中になって現実から乖離して逝く。そうしながらも、エレクトイオン、プロピュライア、アテナ・ニケ神殿。聖域を逆に辿ることは正当でも、正統的でもないと感じたので、僕はプロピュライアから（アテナ・ニケ神殿を見ながら）パルテノン神殿を眺めることを空想した。

異郷の夜、レストランでの食事をする。ブズキ音楽が演奏されていた。ブズキという弦楽器で奏でるこの民族音楽は、トルコから持ち込まれたものだという。哀愁の籠もった地中海民族的な、いや、人類の原的な、共通する哀しみのある、どこか懐かしさを感じさせるメロディであった。

翌日は博物館を廻り、その翌日は地中海クルーズで数日、諸島を廻った。

ミコノス、サントトリーニ。光燦々たる白い建物と青い蒼い碧い海。青と白の清楚、さやかさ、清々しさ、崇高なる神々しさだ。存在ということの神聖さ。ポジティブ、プレゼンスという言葉が真紅の帯に黄金で記されて脳裡を舞う。永遠の紋章をなした。

白くて高い崖に立って、延び上がる斐璃空の四肢は美しい。白皙の繊細、精緻が海の深い青に映えた。光燦に裂熾する女神降臨であるかのように。

胸をすく感動が突如、僕を襲った。この一瞬丈でも、すべてを肯定する価値があるかに思える。諸感覚が天の蒼穹に翼を広げ、無際限に拡がった。自由である。大いなる自由、あまりにも無際限な自由になって、拡がって逝った。

ダンテ・アレグリのベアトリーチェを想う。ゲーテの『ファウスト』のグレートヒエンを想う。女性は救いか。永遠の慈悲か、永遠の愛か。まったく理窟は成り立っていない。理不尽なこと、極まりない。まるで、蒙昧なる迷信であった。だが、僕は理論を超えた超越的な思想に惹かれた。

論理は拠のない骸で、何も解決できていない。むしろ、力ある超越が現実と思えた。それが確かなもの、積極哲学、事実哲学（現実には理を弁えない理不尽であるが、旧来の哲学は理性で分析できるものしか取り扱わなかった。だが、理不尽も事実であり、その事実に対して積極的に関与する哲学）であると考えた。又はパルメニデスの「ト・エオン（〜である）」にも思いを馳せた。

聖なる、永遠の女性は、聖なる真理か。永遠の愛か。そんなものは、男の幻想か。結局は、性と子孫繁栄という、生の本質に衝き動かされてのことに過ぎないのか。新陳代謝し、不安定な存在者であることを存続させようとする生物の本質でしかないのか。種としての存続か個体存続か。

だが、それ以前に、僕らがそういう見解を抱くに至るのは事実を観察した結果であるが、その観察は正しいのか、科学的な立場で客観的な見地から観察する方法は正しいのか。もっと深く言って、観察というやり方（手法）は正しいのか。実際、事実が見えているのか。僕らは僕らが事物と対峙して観察という行為をしていると直観しているが、それが正しいのか。しかしながら、眼は眼を証明することができない。いったい、観察という行為は何か。事実とは何か。答はない。これも未遂不収のままか。

サントリーニの夕焼けを見て、僕は斐璃空女神について考えている。彼女は今日、誰かとメールしていた。僕にはそれが気になった。淡い嫉妬だ。愉快なことだ。かくもじぶんは煩惱の塊だ。執著の塊だ。どうでもよい。彼女は神聖である。なぜなら、普通の女の子だから。だから、崇高な神性がある。超越的な神聖がある。世俗的な価値に叛逆する、アンチな価値観とも言えた。それほどでもないか。

いいや、ギリシャの肯定が僕に与えた幻想かもしれない。

飛行機のなかで、僕はギリシャの明朗な、碧空のような肯定を反芻していた。睿黎児が僕に突然、訊く。

「な、ところでさ、いずれ死ぬんだから、すべての価値観は虚しいのか？ 生きていられ

る間に精一杯、努力することは無意義なのか。生きていられる時間を有意義に生き抜くべきじゃないのか」

唐突であった。どうして今訊くのであろう、そんな話はしていなかったのに、と意外の感を抱く。

暫時、応えるきぶんにならなかった。あたりまえなことを説明することは難しいし、面倒臭い。腹立たしくも感じた。相手の質問のうちに込められた期待を大いに裏切りたくもなる。

「実際、死を眼のまえにすると、よいか悪いかに関係なく、そういうきぶんになってしまう。是非じゃないんだ。そういう意味では、原因もわからない。死へのショックですべてが崩落してしまうとも言えるけど」

「ふうん、無駄という訳でもないってことか。確かに、そういうような、何て言うか、きぶんにはなっちゃうだろうな」

「原因がわからなければ、理由もわからない。

ただ、その事実から推察して、僕らの普段の価値観は生きていられる間丈、成り立つものだと言える。それが心地よいから、実用されているけど、見る限りに於いて、普段の価値観、日常的な庶民感情、日々の茶飯な生活感覚、つまり、*“人生”* の実在性についても、それはそのなか丈で完結していて、客観的な観察眼から観照した時には、科学的な根拠はまったく見出せない。ただ、意識に在る丈だ。擦り込まれ、感覚に違和感がなく、馴染んでいる丈だ。神経伝達物質が分泌され、納得という心的現象が起こっている丈だ」

「迷信に近いな。感覚にはリアルでも、実在性はない、って感じか」

カウンセリングにまず同調から入るといふ手法があるらしい。それをされているようなきぶんになってきた。彼は学ぶと試さずにはいられない人だ。

「ただの仮象で、方便で、中味は空っぽで、空疎だ。形骸でしかない。彫琢刻鏤したかもしれないが捏造品だ。何も無い大空に架け渡した棚さ。棚を支えるべき二本の柱はない。経緯や根拠が不明で、結果的に唐突としか思えない指定だ。僕らの論理の範疇表に遵えば、そうなる。僕らは範疇の球体の内部でしか生きられない」

「じゃ、やっぱり、無為か。他にすることないけどな。範疇表に遵わない場合は？ 球体から逸脱した場合は」

「未遂不収さ。」

仏陀はそれを恐るべき荒野と呼んだ。

だから、努力することは有意義だ。正義はある。真の究竟の真実の義は現実存在する。つまり、無ですらないということ丈さ」

「ふ。寥の方がよほどシニカルだな」

そう言って笑った。睿黎児は窓の外を眺めてもう語らなかつた。疲れたであろう。

しかし、そのような人道的配慮はどうでもよい。僕は他の考えに囚われていた。

先程の腹立たしさは霧散していたが、恥ずかしく、愚かと思う。なぜ、腹は立つのか。自己の尊厳を廻る戦い。自尊心、すなわち、自己の尊厳を損なわれたかのような、自衛の感情であろう。自己肯定の本能は自己保存に由来する。生存だ。

生きている人間の身勝手な価値観のなかで、じぶんも十分に生きている。世俗の虜である。他に道はなかつた。でも、生物としてしか生きられない。だから、いいんだ（仕方ないんだ）。他に選択肢がない。実際、ホモ・サピエンスとしてのじぶんよりもアニマルとしてのじぶん、生きものとしてのじぶんの方がより根源的なかもしれないからと結論しつつ。

僕はフランス共和国に降り立つ。首都パリに移動し、一泊ののち、早朝に出でて、ルーブル美術館へ行った。今日一日ではとても廻り切れないであろうと予感しつつ。広場中枢にあるガラスのピラミッドからエスカレーターで地下に降り、チケットを購入する。

「さあ、行きましょう」

赤い唇、白い歯、碧い眼の叔母はフランス国旗のようだった。アポリネールの詩にそんなフレーズがあったような気がする。

壮大な階段の、中段、ちょうど左右に分かれて折り返す踊り場に、崇高なる勝利の女神『サモトラケのニケ』像があつた。見上げると生命を鼓舞する。風を孕んで広げられる翼の造形、天から船の舳先に降臨した様相、両腕も頭首も^{かけこぼ}缺毀れてしまっているが、動的でドラマチックな、風に吹かれ、靡く衣の襞。ヘレニズム様式の古代ギリシャ彫刻だ。

僕は館内を象徴の森を翔るように、駈け廻った。歴史あるさまざまな、逝にしへの絵画たちの狭間を。それらは一連の、精神的に極彩を奏でる絵巻物だ。

ドラクロワ『民衆を導く自由の女神』、ルーベンスが女王マリー・ド・メデイシスの偉業を描いた連作、新古典主義の画家アングルの『グランド・オダリスク』、ルイ・ダヴィッドの壮大なる『ナポレオン一世の戴冠式と皇妃ジョゼフィーヌの戴冠』、フェルメールが市民生活の日常を描いた『レースを編む女』、レンブラント『ダビデ王の手紙を手にし

たバテシバの水浴』、ジェリコー『メデューズ号の筏』、華麗なるベラスケス『マルガリータ王女』、光と陰で劇的な一瞬を捉えるカラヴァッジオ『聖母の死』、ラファエロ『聖母子と幼児聖ヨハネ』、神妙なるダ・ヴィンチの『モナ・リザ』。僕は昏い緑の背景を見ると蒼古という言葉を想起した。微妙で繊細な起伏は奥深い空間に秘められ、真樞に実在していると感覚させる。『ヴィルヌーブ・レ・ザヴィニョンのピエタ』の深い悲哀。『ピエタ』とは慈悲という意味だが、磔刑から降架されたイエスの亡骸を抱く聖母マリアの様子を言う。

ギリシャとは異なる偉があった。広やかさや蒼穹のごとき崇高の、あの感じと少し違い、莊嚴であるゆえに、又重くもあった。だが、美の崇高がある。僕は夢中になった。生きることは素晴らしいとも思えてくる。

見上げる『ミロのヴィーナス』を眺め、強くそう想った。均整、規範、偉壮、崇高、美、燦、壮麗、人間の叡智のすべてがある。節度深くソリッドなのに神的に甚深だ。人間は何と素晴らしいのか。生への讃歌だ。

厳かな芸術の群れの、果てしない摩訶不思議の森を廻り、大銀河の星々の海を夢のように彷徨い、僕は魂となって遊覧していた。

憧れのニコラ・プッサン『アルカディアの牧人たち』もあった。メメント・モリ。古代では、死を忘れる莫れ（明日は死ぬ、食べて、呑んで、陽気になって、今を愉しめ）という意味であつたらしいが、キリスト教以降、現世俗の悦びや贅沢が虚しいものであるという、神の国の未来を想えという意味に変わった。

プッサンの絵はキリスト教以降の価値観で描かれていると思われる。アルカディア（理想郷）にも死（死神）がいるということを表す「アルカディアにも我在り」という墓石の碑文を牧人たちが指差し、眺めている。四人の群像のうち、三人までは牧人と思われるが、そのうちの一人、右側の人物丈は牧人ではないようだ。古代古典期のギリシャの彫刻のような均整の美。揺るぎない、明朗明快な色彩。死を忘れさせる媚薬だ。

どちらかと言えば、古代に言われた意味の方がふさわしい。

そのような今まで得られなかった感慨を抱く。実際に眼のまえに見れば、考えも想いもまた変わるものだ。きもちが昂った。

心の昂揚、諸感覚器官の興奮の醒めぬその夜、ホテルの部屋で、タブレットにダウンロードしていたドストエフスキーの文章を読んでいた。睿黎児は疲れて眠っている。僕は今

までも『カラマーゾフの兄弟』の大審問官（イワンが創作したという物語）の部分丈を何度も繰り返し読んでいる。

僕も疲労を覚え、違うものを探す。トルストイの『戦争と平和』を読む。小説の味わいとは不思議なものである。明快明朗な古代ギリシャのようであった。いや、少し違うが、ドストエフスキーを読んだ後だとそういう感じを覚える。しかし、ドストエフスキーにしても、『地下室の手記』は寂びた乾燥を感じる（半ばドキュメントであるからか？）。

ああ、それにしても、異国に來ると心機が転ずるのか。僕はじぶんを超過激に、パンキッシュになつていた。革命とは天命が革まることを言う。転回^{ケイレ}か。何だか可笑しくなつた。ブレーン・ストーミングのように聯想を次々口に出している丈だ。扱^さて、風立ちぬ。いざ生きめやも。

決して、解決にはならないメモメント・モリ。だが、これしかない。たとえ、間違つていても、そうではないか。死に囚われて、怯懦に憂鬱に生きるのは辛過ぎる。

翌日、オルセー美術館へ行く。

クールベ『オルナンの埋葬』、セザンヌ『リンゴとオレンジのある静物』、ゴーギャン『タヒチの女』、ドガ『バレエのレッスン』、ルノワール『ムーラン・ド・ラ・ギャレット』、クロード・モネ『日傘の女』などなど。苦楽あり、美醜も、幸も不幸もあるが、すべてが華々しい。これら色彩や描線は生への讃歌に思える。

僕はゴッホの『アルルの部屋』のまえで止まった。

ここには、向日葵の絵はない。だが、僕は『アルルの部屋』を観ながら、向日葵の絵を想っていた。

いったい、ゴッホの黄色しかない向日葵の絵画は何を描くものか。太陽か。真つ黄つ黄に塗り潰し、どこにも逃げ場も隠れ場も、居場所すらも見出せない絵を、なぜ、画くのか。又この人の短い人生は理解し難い。

キリスト教の伝導師に憧れ、伝導師になつたが、労働者の生活のなかに入つて、敢えて衣服も惨めなみすばらしいものとなり果てる任せ、ともに苦しみうとする常軌を逸した行動が伝導師の威厳を失墜させるものとして、仮免許と俸給は剥奪された。労働爭議の起こる炭鉱の町で、苦しみの中に神の癒しを見出そうという彼の言葉は、過酷な社会システムに抑圧された労働者たちの理解を得られるはずもなく、すべて絶望的であつた。虐げられたる運命を崇高、神聖と考える考え方は、キリストの苦難とともにあろうとする考えや、

現実そのままを運命として受け入れる崇高とも感じられた。それが苦しみと呼ぶのか、ゴッホは自身の意に反して人生を毀さずにいられない人、不幸な人であった。

絵には、そのすべてが込められている。芸術は何と深いものか。生きるということは、けれど、芸術家も死ぬ。

思い返せば、ゴッホの死は謎であった。麦畑付近で、という説をよく読むが、目撃した者はいない。銃で自殺と言えは、こめかみに銃口を当てるとか、口に銜えてなど、そういうかたちを映画やテレビでよく見るが、彼の場合は左胸（心臓は逸れた）であった。右手で、じぶんの左胸を撃つことが難しいことや、手に火薬の燃えカスがないことなどが自然で、自殺説を否定する説、事故説や他殺説もある。何だか、そういうのは彼にふさわしくない。現実にはシニカルである。僕はどのように死ぬのであろう。

彼もキリスト教を深く信じ、虐げられたる魂の癒し、救いとして縋っていた。自己破壊的に。世間一般の世俗的な価値観に逆らって、或る意味、被虐的精神で、とも言えるのかもしれない。僕はルーブル美術館で観たピエタを想起するとともに、莊周の考えたと思われる真人を思い起こした。

キリスト教の教えは超越的である。眼には眼を、歯には歯をということが常識であった暴力的な古代に於いて、「汝の敵を愛せよ」や「右の頬を打たれたならば、左の頬を差し出せ」という考えは革命的に超過激であったとも言える。

空港への見送りには叔母も睿黎児も斐璃空も来てくれた。空は青い。

僕は彼女の眸に寂しさを期待したが、無為であった。帰りの席はなぜか空いていて、体は比較的楽であったが、心は沈んでいてどうにもならない。

これも生への執著である。生存が僕らへ仕掛ける罠だ。子孫繁栄への道。僕は一生恋愛小説を書けない。

日本に帰り、切なさを覚えつつも、僕は斐璃空を知られざる女神と想ううちに、メメント・モリの古代的な意義の妙なる調べに惹かれ魅せられ、世俗的な価値観に塗れようと決した。時給のアルバイトを始める。アルバイトなどと称しても、社会参加とは言えない。ただ、親戚の喫茶店を手伝う丈であった。

短い時間だったし、田舎であるため、お客さんの少ない、暇な仕事である。リハビリには、ちょうど良いと考えた。日々粛々と過ごす。

僕は既に多くのことを断念していた。時折、じぶんの得た境地を言いたいという衝動に襲われ、名誉や称讃を得たいという自己肯定の衝動に駆られることもあったが、人の理解

を得ることを無為と考えるようになっていた。

人の評価は虚しい。究極的に言えば、人は皆じぶんの都合で勝手なことを言っている丈である。勝手な思い込みによる価値観や自己肯定へ繋がる賞讃、すべては思惑に過ぎない。無名こそ神の与へ給う真の勲章である。真実である。リアルである。

思えば、理解が絶空であるならば、じぶんの事物への理解も絶空であり、他者のじぶんへの理解も絶空である。人はともにありながら、独りぼっちで生きているに齊しい。

真(眞)という文字は匕と県とから構成され、甲骨文字に還すとわかり易いが、匕は人という文字のむきが逆になったものであり、県(目は顔、首から上を表す)は木などから首を逆さに懸けた象形文字である。県を土地の境に置いて、嗔恚に満ちた怨霊の力で人が通るのを阻止する呪詛であった。

真とは、非業の死を遂げた者、顛死者、枉死者をいう。枉とは曲がる、逸れることで、道を逸れる、すなわち、枉死は横死(横変死)であり、不慮の事故など、普通ではない不幸な死に方である。

莊周はそれを以て最高の理想とした。それゆえ、今日、僕らは真という言葉のアレーテイア(真理、真実、真相。古代ギリシャ語)の意味で用いる。

莊子は「真人は生を説ぶことを知らず、死を惡むことを知らず」と言い、又、「生まれ出ずるを訢ばす、死に入ることを拒まず、生の始まる処を忘れず、生の終わる処を求めず、生を受けてこれを喜び、死を忘れて之れに復る」と言った。

これは万物斉同の思想へ繋がるであろう。対立も差別も消滅し、すべて同じであるという考えである。生も死も、移ろいの中に過ぎない。実体は何も変わらない。絶対者であり、真実在の「道」は不生不滅であると考え、人為・人間の知を相対的な知として否定した。因みに、莊周は死を未生、生まれる前の状態と同じと考え、「死に復る」と言っている。

しかし、さりとて、なぜ、普通の死に方の者ではなく、非業の死を遂げた者でなければならなかったのか。非業・枉(横)死など、相対的な知に過ぎないからか。世俗の下卑た価値観と真逆にあるからか。……わからない。

思えば、「不死の甘露」である仏の教えの太祖である釈迦牟尼は罹病し、喉の渴きを訴えて水が飲みたいと言い、竟には斃れ伏し、死した。普通の人々と変わらない。

逆に、もし、聖なる尊者が不死を希うならば、それは死を怖れているということではか

ない。釈迦牟尼は真の不死を得た。普通に死ぬこと。死は避けられない道理であること。それが人間の畢竟であり、真究竟真実義である。

僕は聖なる解脱、崇高なる悟りに達したかのように解放され、魂魄が震えるように大いに陶醉した。

一年半後、新型コロナウイルスのデルタ株が猛威を振るい、僕は感染した。十九歳になっ

ていた。どこで感染したものか、まったくわからなかったが、感染力の強いデルタ株なので、あまり出歩かない僕であっても（ただし、その頃は少し元気になっていて、進学もしていないから、時間がたつぷり余っていて、時々都市部や田舎を歩いていた）、新型コロナウイルス感染症に罹ってもおかしくはない時期であった。

第五回目の緊急事態宣言が出され、夏休みが終わっても、学校を再開すべきかどうか議論がされていた時期であった。

まず咳が出るなど感じた。味覚や嗅覚は正常である。しかし、発熱した。その日の夕方、冷房の効いた部屋で転寝をしていたら、体が冷え切っていて、急いで暖かい恰好をしたが、今度は急に体が熱くなり、念のためと思って熱を測ると、37.9度であった。もう一度測った。同じだ。発熱外来を予約した。幸い明日の十時からならば、入れるという。

抗原検査の結果は陽性で、その日の夕方遅くに保健所から電話があり、発症日から二日遡って濃厚接触者を特定する聴き取りが簡単に行われた。濃厚接触者として特定されるのは、マスクなしで一五分以上、一メートル以内にいた人ということであったが、該当するのは家族丈であった。

僕の方は発症日を〇日目として、十日間の健康観察を指示された。要するに自宅療養せよということである。

最初は腰や脇腹が痛く、皮膚がひりひりと痛かった。食欲がまったくなく、空腹なのに食べる気力が起きなかった。咳はあまりなく、味覚や嗅覚の障害はなかった。

保健所からパルス・メーターが届いたが、その頃は測定してもまだ九十六%くらいはあった。頭痛が烈しく、まったく眠れなかった。熱も下がらなかったが、朝冷え切った体に熱いシャワーを浴びると一瞬丈楽になり、熱が下がった。しかし、苦しみはすぐに戻った。

五日ほど経つと、体の痛み皮膚の痛みは薄れた。

頭痛と、次第に意識されてきたのが呼吸の苦しさであった。血中酸素濃度も八十九％程度まで下がっていた。

次第に息が苦しくなってくるというのは、怖ろしい体験であった。肺は酸素を求めている。脳裡に級友の死がまざまざと甦った。身も震わすほどの畏怖として、眼を背けたくとも背けられない。それは悪夢のようであった。

このまま、酸素が吸えなくなってしまうという恐怖がじわじわと迫る。息が苦しい、息が。母は保健所に電話した。

「どうしたらよいでしょう」

「今は紹介できる病院がありません。救急車を呼んでください」
病床はどこもいっぱいだった。

「貸し出せる酸素とかないですか」

「もう、すべて出ています。救急車を呼んでください」

救急車を呼ぶ。来た。来たのはよいが、二時間以上、探し回った挙句、受け入れてくれる病院がなく、何と信じ難いことに、僕はそのまま家に帰された。これで、どうしろと言うのか？ 死ねという以外の意味はない。本当に、もっと切羽詰まって、死にそうでも、この扱いなのだろうか。

後に実際そうであることがわかった。

何ということだ、信じられない。見殺しではないか。文明国で。どうにもならないのか。設備なんてなくてもよい、ベッドもだ。

たとえば、病院の廊下でよいから置いて欲しい。そこで死んでも、訴えたりしない。家に放置よりはましである。病院なら、医師も看護師もいる。その人たちが同じ空間にいる丈で、安心感が違う。

あゝ、そんなこともわからないのか、貴様ら、じぶんやじぶんの家族のことであつたら、もっと必死になるだろう。こっちにとっちゃ、世界すべての終わりだ。死ねば、すべてが闇に閉ざされて終わる。何もかもがなくなる。見えていたものも、聞こえていたものも！ もっと必死になってくれっ！ 頼むっ！ お願いだっ！ 心が絶叫していた。

狂裂し、凄絶になって逝く。

あゝ、自宅放置で死ぬならば、怨霊となって、永劫に恨む。祟り神となって、天を蔽い、世に災害と戦乱と飢饉と疫病との大災厄を招いてやるっ、どうだ、これが生存への執著だ。あああつ！ 頼む、お願いだ、酸素をくれっ！ ああああーっ、酸素っ、酸素だっ、酸素

丈でいいっ！ あぎゃぼじゃぼぎゃいぐわらや！

その真夜中を境に、体調は回復傾向を示した。肉体の緊張がゆつくり少しずつ解け始める。やがて、窓から見る漆黒が濃紺に変わった。

未だ息も絶え絶えな状態でも、僕は理性に立ち返って、想う。あゝ、すべて無駄だった、と。あの頃と結局、何一つ変わっていない。いや、わかっていたはずだ。変わりようなど、つまり、逃れようなどないということを。結局、何かの境地、又は心機を得たようなきぶんになり、悟ったとか、諦めたとか、覚悟したかのような思いに至り、そう感じ、そういう言葉を使い、感銘していても、死が迫るのをリアルに感じる時には、何もかもすべてが瓦解する。死という最も切実な現実のまえに。自己を喪い、理不尽の極みとなり果て、細胞の集合体に還る。

生きていられるときは、意地を張って面子を保っている丈だ。偉大な禅師たちなどは、心虚しゆうすれば、よいと言うが、あなたたちがそうであったとしても、僕は違う。僕はなれない。解脱の究竟へと善逝したような神の氣を天授したきぶんになっけていても、いざ死をまえにした途端、挫折し、後悔し、直ちに怯懦へと帰還する。

僕は幸いに助かった。未だ黎明にならぬ青き刻にそう実感する。

人を恨んだことを、罪のない人たちを恨んだことを恥じた。特に、日本社会で感染者が急増し、医療機関の逼迫、医療崩壊寸前で、疲弊しながらも頑張っている人たちをわずかも恨んだことを自責し、苦しんだ。消えてなくなりたいくらい（できようはずもないが）のきもちに襲われたが、死ぬなどは思いも寄らず、ただ、不適切な発言を全部撤回したいという想いであった。但し、切にさよう願望するのは名誉心であり、その動機を突き詰めれば、窮極的には生存への執著に過ぎない。などという言い方しかできない僕だが、真の反省をし、恥辱が魂に刻まれた。むろん、憤りは虚言ではなかった。あの時は本音だが、どうか赦して戴きたい。生死の際が眼のまえに迫って理性が喪失してしまった。野性の獣に還ってしまった。

人も未だ獣の類いに過ぎない。あゝ、でも、そう言ってしまえば、言い訳でしかない。浅ましい。下衆だ。全然、反省していない。あまりにも脆弱な僕、僕の思想信条、僕の理性、僕の真奥の魂、僕の人間性。つまり、そんなものは、生まれつき喪失も同然であった。

光が、黎明が兆し始める。

顧みれば、軽症者のうちであったのであろう。重症などとは程遠く、きつと、中等症にすら遙かに届かなかったのであろう。それにしても、じぶんの想うじぶんらしい人格というものが、どれほどまでに幻想であり(そんな幻想は持っていないつもりであったのに)、憶断であり(憶断からも逃れられない)、刹那的で実体のない、儚いものであるかを痛烈に味わった。

じぶんの人格というものが有機分子の化学反応のように、それはたとえば四十億年前の地球の海で火を噴く火山の島の熱水噴出孔の潮水の溜り場の縁で起きた特殊な化学反応によって核酸が生じ、濃度が高ずるにつれ、分子が互いに繋がっていき、リボ核酸(RNA)となって、さらにはデオキシリボ核酸(DNA)へと化し、細胞の原初の原型をなすも、安定を保てずすぐに壊れてまた縁り結ぶの繰り返し、それが我らの起源であるように、僕らの人格も起源に忠実にその刹那ごとに縁りて結びついた丈であって、すぐに壊れてなくなってしまうものであるかを覚った。ただ、偶然で危うくも微妙なるバランスの上に成り立っている刹那的な、一億分の一秒未満の間も、かたちを存続維持できない、一瞬たりとしても同一性を保てない、その都度その都度の現象に過ぎない、無限に短い(面積を持たない一次元の点のような)一点未満の時間ごとに縁りて結ばれている仮の象に過ぎないかを知る。それが一定のかたちを、完全なる一定ではないが、ほぼ類似した一定のかたちを維持し、それを維持していられる間丈は、その人はその人であるが、バランスが崩れてしまえば、異なるかたちを縁り結び、その人は別の人(現象)となり果ててしまう。

人格も、一刹那のバランスの上に丈成り立つ現象、又は仮象に過ぎないとすれば、畢竟、及び究竟を言えば、人格などというものは幻想であって、実在はしない。ならば、そもそも、人は存在していないことになる。人生もない。死は、人生の喪失という意味では死でなくなる。これが科学的見解であった。但し、科学に依らないのであれば、そうではない。しかし、何を今さら、新たに学んだかのように言うか。同じような言及をしていたではないか。経験と未経験の違い、か。

夜が明け、曙光に照らされ、改めて畏怖に襲われ、慨嘆した。

あゝ、だが、それにしても、もし、あのまま終わっていたら、僕は闇に消え、未来永劫、そのままであったであろう。つまり、僕の意識は無へと化す。人格は架空、かつ幻影であると言いながら、それがとても怖い。あの世という、死後世界がなかったとしたならば、であるが。

死は絶空で、生は絶空、互いに絶空いえどと雖も、さような考えは感性にリアルではない。い

や、絶空は何者でもないの、未遂不収であるから、……いや、いや、キリがない。それにしても、僕が可能性の一つとして言及した丈であっても、「あの世」などという語を口にしようものならば、嘲笑う人も多かろう、たとえば、

「そんなものないに決まっているじゃないか、あの世なんて、莫迦莫迦しい」

しかしながら、そう言う人たちは何の根拠があつて言うのであるうか、何の証拠が、何の検証をしたと言うのか。そういう経験があつて言うのであろうか。

もし、それらが無いにも関わらず、さように言うのであるならば、それを聴く僕らがいかん受止め、次のどう行動するかは、それぞれの考え次第である。

「どうして、あなた方はそんなことを言うのか。なぜ。」

死体が僕らから見て生命活動の停止と見え、魂魄が抜けて物質同様になり（科学的に言えば、元々物質だが）、意識が停まって無に帰しているかのように見えるからか。だが、僕らの意識はインパルスが起きているという丈の、化学反応でしかない。死が物質化であるとしても、生きている時も物的現象でしかない。客観的には何も変わらない。もし、眼に映えるものが観たままに、事実や真実や現実であるとするならば、という条件付きであるが」

「物質としては同じであっても、死者の亡骸には生命と定義されるべき有機分子の活動がない。物質的な有機分子の化学反応はあるかもしれないが、生命活動として特定されるべき化学反応ではない」

「だから、死であると言うのか。無に帰していると。」

生命というかたちの輪郭をいかに決めたか。特性の区分をいかに。区分の範疇表をいかに定めたか。その想いつきの根拠は何か。そもそも、*「かたちの定義」*と呼ぶそれは何か。

さらに言及すれば、死して後も、有機分子は化学的な反応をしない訳ではない。だが、有機分子の反応の差別の理由は何か」

「差異がある。生命活動と定義された科学的、又は化学的な現象が生命活動だ。あたりまえなことだが。現に眼の前で起こっている差異について語っているんだぜ、眼の^ま当たりに明晰判明だ」

「差異ね。ふうん、つまり、もうそこから先を問われたら、答えられないと言うことか。しかも、物質的な事象が僕らの内部では、僕らの人生であり、感情であり、思想であり、精神であり、魂である。そのことを鑑みれば、死後に物質的になったかに見えても、内部で何が起こっているかは、逝った者にしかわからない」

妄想上の論敵が消え去っても、僕はじぶんの考えに夢中になり、演ずるような独り言はますます止まらなくなった。

「そもそも、すべては僕らの眼のまえに在るかのように映っているそのままなのか、見たままと考えてよいのか、

それで間違いないのか。網膜に受容しているものは、光線の波長丈である。観察して映るものは、そのとおりそのまま、現実（事実（真実））であると考えて大丈夫なのであろうか。

それを保証できるか。誰も検証していないし、検証することなど、未来永劫あり得ないと思う。眼は眼を検証できない。少なくとも、僕らが現状で使用している論理憲法の定めるところに遵う思考、論理という憲法に関連する法令の各条、各項及び各号に規定するところに拠れば。そう、飽くまでも拠れば、だ。じゃ、拠らなければ？

想像もつかない。論理という在り方以外の思考は、空想のうちにも描けない。つかむものない虚空で何かをつかもうと足掻き藻掻くようで、僕にはまったくどうしてよいかわからない、論理思考以外の思考などできない。

それゆえに言おう、見てもいないもの・ことを、確認も検証もしていないもの・ことを、一方的に否定し、ないと決定することは途方もなく癡かなことだと。はつきりと言っておう。但し、ないと言い切ることを否定する理由と同じ理由で、僕は在ると言い切ることも否定する。どちらも決定に至る検証や証拠や根拠や経験がない。現行で思考の道程を決定する論理憲法及び関連各法令に随って思考する限りに於いては。

拠って、遵わなければ、まったくべつだが。しかし、それは可能か？ 僕には、まったく不可能だね」

手懸り足懸りすらもない。未遂不収のまま放置しかない。ただ、眼のまえに定義のない現実がある丈であった。

定義はなくとも、食べる意欲は甦り、朝粥を啜った。釈迦は苦行をやめた時、スジャータの供養した乳粥を食す。想いはしみじみと古典を鑑みた。

般若波羅蜜多心経に曰く、「色即是空・空即是色」と。色を物質的な現象と解し、空を零（シューニヤ）、無空（僕が言う無空は「空がない」という意味）、及び絶空と解すれば、すなわち、死である。生は死なり、死は生なりとも読める。

疲弊した軀は太陽の頂点なる正午になると、眠気を覚え、午睡し、夕刻に渴きで目覚めた。水で喉を潤す。思惟し、論を考え、脳裡に想う。

「死しても、何も変わらない。僕らの意識・思惟・考概など、脳神経細胞のうちにあるイオンと外にあるイオンの電荷の正と負の関係が瞬間的に逆転する現象、この化学的な反応によって起こる電気的な意味での発火現象、インパルスに過ぎない。有機分子の化学反応でしかない。ニューロンのうちでインパルスが起こり、その刺激で神経伝達物質がシナプス間隙を超えて次のニューロンの樹状突起の受容体まで達し、その刺激でそのニューロンにインパルスが起こる。物的現象だ。又、草木の意識、水の意識、岩の意識、空気の意識と同じと言える。齊同か」

そう想いながらも、僕はカウンター・メロディ（対旋律）のよう、自らに反駁する、「いや、いや、生は無ではない。在る、ではないかもしれない。でも、僕は存^いる。とにかくも、この意識がある。現にいる。少なくとも、実在か、否か、確かめようはなく、それらが何であるかわからなくとも実存する」

昏^{くも}く感じるほど、強く濃い黄昏は遂に没す。幻聴であろうか、又は聞こえるかのように感じさせる何かが脳のうちで起こっているのか、どうしてそのうちのどれかであるかを特定する能力が人間にあるうか。

歌声であった。和声が響く。篝火が燃えている。僕は唐突に放擲されていた。炎以外は真つ暗闇である。神殿の祭壇のような背景の舞台であった。なぜか、それがわかる。

声は古代ギリシャ悲劇の仮面の合唱隊のようでもあった。不吉な運命を孕んでいる。いつか僕が言った科白を歌い始めていた。

「そのとおり。無などはない。つまり、存在はある。無すらもないということである。存在は間違はなく、存在である。つまり、無ですらないということだ」

真夜中、肉体は褻れても、昂った神経に眼は冴え、僕の思考は元の地位に返り咲き、逝にしへの書齋にて懲りずに空転を再開する。生活が甦っていた。思う、

「死しても、生きても、科学的な事実としては同じく物質という事実である。死後に意識があるうが、死して意識がなからうが、まったく同じことである。『同じ』と言うべきか。

それは観察の結果である。しかし、眼に抛る観察は光線の波長の長短が赤から紫の色彩として映ずる効果を脳裡に与えているに過ぎない。現に、色彩は実在していない。同じように、聴覚や嗅覚や味覚や触覚も、耳や鼻や舌や皮膚などで受信され、脳に於いてそう聴こえるよう、臭いがするよう、味がするよう、感じられるように、構成されている丈であって、機となる起因によって生じる効果でしかなく、実在でもなければ、物ごと・事象の実態でもない。

だが、この認識自体が観察の結果である。

結局、眼は眼を見ない、の喩えで終わってしまう。もっとも、比喩の元ネタとなっている、眼が眼を見ないという事実も観察の結果だが」

しかしながら、未遂不収では、何の解決にもならない。死ぬまえ、細胞は、ただ、酸素を欲す^{※1}。それ丈しかない。その絶対的な事実しかない。原注※1 むろん、酸素丈ではない。

人は皆、人に知られず独り無名に生まれ、人に知られずに独り生き、人知れず無名のままに独り死す。

実際には、死ぬとどうなるかはわかっていない。ただ、想うに、独りで闇のなかに墜ち、誰も立ち入れない。もう叫びは聞こえない。ただ、堕ちて逝く丈。誰もいない。独りになつて、もはや、何かを伝えることも、知ってもらうこともできぬまま、孤独な無名者であるかのごとく死す。記憶も精神も喪われ、何もかも消え去って逝く。戻って来られない。すべてが終わって、無すらもない無へ。

今、僕が空想するに於いては、それしかない。

死ぬ日が来て、死ぬその瞬間まではわかるはずもない。但し、死ぬ日が来ても、科学的な見解の人々が想うような無となってしまうのであるならば、わかるという、脳の活動が起こらない。

かくして瞬^{いま}今、二十歳となりし。人生を舐めていると言われても仕方のない気楽な甘いゆとりある親戚バイト生活にも慣れ、ドライ・フラワーを眺めていた。乾燥を見続けている。さらさらと明晰な静けさであった。このまま、しずかに生きていたい。生き続けていたかった。何もかもを忘れ果て。竟にその時が来て、死ぬのかと動揺し、死に瀕し苦しいと悶え、逝く。

それまでは忘却の海に泳ぎ、惚け、身をふやけさせ、楽しもうよ。メメント・モリに乾杯を捧げて。虚しくグラスを涮る泡よ、愉しそうに舞う、細密精緻なる泡よ。間違った考えではあるが、僕は最初から間違ったこと丈を語っている。心配ない。間違っていようが間違っていまいが、渺々として、もの凄く透明な乾燥がある丈。

あゝ、逃避することしかできない。それ以外のことができたとしても、その行為の真髄には、逃避が染み透っている。遁れ難く瀝青のように附着し、真髄そのもののごとく乖離できない。死は越えられない。人の思惟や意識や理性など、生存や化学的な現象にくらぶ

れば、深さ一万 m なる海の原の表面丈を、ゆらゆら左へ右へ、されるがままの一枚の枯れ葉、ですらない。